6 都市・境界・アート
―コミュニケーション空間の相互行為的生成について―
City, Interzone and Art: On the Interactional Generation of Communicative Space

教授　福島 祥行　博士（文学）
大阪市立大学大学院文学研究科言語文化学専攻
フランス語圏言語文化学
FUKUSHIMA Yoshiyuki, PhD.（Letters）
Professor of Francophone Language and Cultures
Graduate School of Literature and Human Sciences, Osaka City University

人の集積地であり交流地点である「都市」は、かつての「都の市」を、時間的・空間的に拡大しつつひきついだものである。このようなトポスは「外部」と「内部」がオーヴァーラップする空間、すなわち《境界》にほかならない。《境界》とは、福島（2004）に論じたように、物理的な「外部」と「内部」の交叉点、すなわち「周縁」に生成するのみならず、そこに「外部」をひきこむような場である「坂」「河原」「厠」「庭」などの「周縁的ポイント」や、心理的空間にも生成される。そこはいわゆる「悪所」であり、遊郭や劇場のような「忌避」と「親密」がかさなりあう空間でもあった。
本稿では、この観点をさらに掘りさげ、「アート」もまた悪所に生成することと、そもそも《境界》はひとびとがつどい、交流すること、すなわちひとびとの相互行為によって、時々刻々と生成と消滅をくりかえす場であり、物理的・心理的に固定されたものではないことを論ずる。くわえて、そのような場のもたらすエネルギーこそが、あらたなアートや都市の活性化の源となることをしめす。

The City that is an assembly and crossing space is the successor of “City’s fair”. Such topos（place）is a space where “the exterior” and “the interior” of community overlap each other. This is “the Interzone”. The Interzone is generated in the space where the exterior is drawn in. Thus, sloping road, dry riverbed, lavatory and garden are the Interzone. Theatre and “licensed quarter” that are the akusho（bad quarter）are also the Interzone by reason that in such space there are awe and adoration at the same time.
This paper aims to affirm these 3 points:
1. The Interzone is generated by the interaction（communication）between “this world = ordinary world”and “another world = extraordinary world”, and after the interaction, this transitory space disappears.
2. In the Interzone, one meets “the Other”. And from this interaction, emerges the unknown force that empowers the ordinary world.
3. “Art” is also generated by this interaction in the Interzone, and has that unknown force.

Keywords: Interzone, Interaction, City, Art, Communication

1. はじめに

数おおくこころみられているアートによる都市再生の典型的な事例として、たとえば「欧州文化首都」European Capital of Culture/capitale européenne de la culture があげられよう[1]。これは、欧州連合の文化的多様性を確認しつつ、欧州市民の相互理解をうみだすべく、当時のギリシャの文化大臣メリナ・メルクーリ Melina Mercouri とフランスの文化大臣ジャック・ラング Jack Lang により開始されたもので[2]、第1回は1985年、開催地はギリシャのアテネであった。以後、毎年、欧州連合の加盟国が、もちまわりで開催し、開催地も、フィレンツェ（1986年、イタリア）、アムステルダム（1987年、オランダ）、西ベルリン（1988年、西ドイツ）、パリ（1989年、フランス）と、各国の首都クラスの都市がえらばれていたが[3]、2000年に9都市がえらばれて以降、複数都市による開催が基本とされるようになる[4]。また、開催都市も、しだいに地方の街がえらばれるようになっていった。これはもちろん、この、1年をつうじ文化行事を展開する事業が、文化面のみならず、政治・経済面においてもおおきな効果をもつからであろうが[5]、近年えらばれている都市が、いずれも国境ちかくの街であることには[6]、ひとつの必然性をみいだすことができよう。すなわち、国境（くにざかい）とは「他者」との「交流地点」であり、「他文化」と「自文化」を析出させつつ、「文化的多様性」をきわだたせるに最適の場にほかならないからである。

しかしながら、筆者の研究によれば、そもそも「文化」とはア・プリオリに前提されるものではなく、「他者」と「自己」との相互行為のなかで構築されてゆくものである。このことは、必然的に、「文化」というものが、そのつどそのつど更新され、あらたにつくりなされてゆくものであることをしめしている。このとき、「都市」はそのような文化を生みだす相互行為の場として機能する。

そもそも、人の集積地であり交流地点である「都市」とは、かつての「都の市」を、時間的・空間的に拡大しつつひきついだものである。このようなトポスは「外部」と「内部」がオーヴァーラップする空間、すなわち《境界》にほかならない。《境界》とは、福島（2004）に論じたように、物理的な「外部」と「内部」の交叉点、すなわち「周縁」に生成するのみならず、そこに「外部」をひきこむ機能をもつ空間、すなわち「坂」「河原」「厠」「庭」などの「周縁的ポイント」にも生成される。そこはいわゆる「悪所」であり、遊郭や劇場のような「忌避」と「親密」がかさなりあう空間でもあった。そして、「文化」、とりわけ「アート」は、そのような「悪所」にこそ生成するものにほかならない。

這般の消息をふまえ、本稿では、《境界》とは、ひとびとがつどい、交流すること、すなわちひとびとの相互行為によって、時々刻々と生成と消滅をくりかえす場であり、物理的・心理的に固定されたものではないことを論じつつ、「都市」という《境界》が、構造的に「アート」を生む空間であることと、ぎゃくに、そのような「アート」の生まれるような場こそが、想像／創造的エネルギーの湧出する「都市」すなわち《境界》であることを主張する。

2.《境界》というトポス

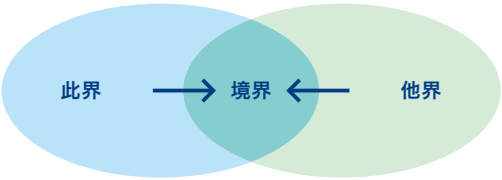
2.1. 他界と此界のあいだ

「境界」という語が frontier や limit という語によって訳されるとき、それは、ある世界の「果て」「際」のことであり、べつの世界と接する「ライン」、すなわち 1 次元世界としてとらえられている。しかしながら、ふたつの世界が接するとき、それが友好的なものであれ敵対的なものであれ、そこにはかならず両者の交流、すなわち「コミュニケーション」が生じる。そして、このことは、コミュニケーション空間という相互行為の場が、ふたつの世界の中間にたちあらわれるということにほかならない。このことは、日常的にわれわれが暮らす世界、すなわち「此界」this world / ce monde と、その外部――すなわち「この世の果て」――に存在する「他界」other wold / autre monde についても、その「中間地帯」interzone が存在することをしめしている[7]。

たとえば、典型的なふたつの世界である「あの世」と「この世」とのあいだには、死者と生者のであう場所が存在する。よくしられている例として、イザナギ・イザナミ[8]の神話をとりあげよう。『古事記』においてイザナギは、焼け死んでしまったイザナミを追って黄泉の国へいたり、妻と再会するも、「見るなの禁忌（タブー）」を犯して伊邪那美と訣別することになるが、その一連の行為がおこなわれるのは、黄泉の国の「殿」となっている。この「殿」の奥でイザナミの蛆のわいた姿――すなわち死者としてのイザナミ――がみられた点と、同種の伝承をしめす『日本書紀』では「殯斂（もがり）の處に到る」とあることから[9]、この「殿」は、本葬までの一定のあいだ遺体を安置する「殯（もがり）の宮」と同等のものであり、この世からあの世へ移行するための中間点であるとかんがえられよう。また、ホメーロスの『オデュッセイア』において、冥界の王ハーデースとその妃ペルセポネーの宮へおもむき、テイレシアースの霊に予言をきけと命ぜられたオデュッセウスは、この世界をとりまく大洋（オーケアノス）の、日の光もとどかぬ果てへといたり、そこで儀式をおこなう。すると、死者の霊たちが「闇＝冥界（エレボス）」からあつまってくるのだが、このことは、この「果て」が「冥界そのもの」ではなく、この世とあの世をつなぐ中間地帯であることをしめしていよう[10]。

このように、「あの世」と「この世」のあいだに「中間地帯」、すなわち《境界》をおくかんがえかたは、そもそも、死後の世界にいたりながらも帰還することが可能な「生者」は、じっさいは死後の世界に進入していない――つまり「死んで」いない――はずだという問題意識に基礎をおいている。かくして、『浦島太郎』の「竜宮城」に代表される「水中他界」も、『桃花源記』の「隠れ里」に代表される「山中他界」も、『メリュジーヌ物語』の「泉」に代表される「森林他界」も、じつは「他界」ではなく、此界と他界の双方からそこに属すものがいたり交流する《境界》なのである。

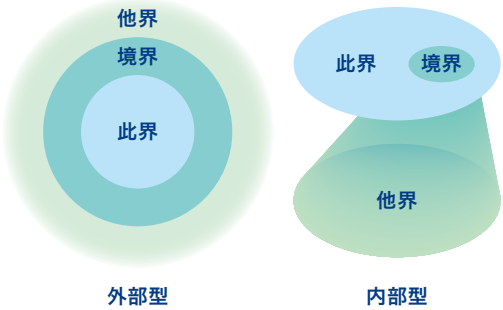
《境界》の図式



2.2.《境界》の構築性

うえでみた「海」「山」「森」などの《境界》は、此界と他界を「物理的」につなぐものであった。同様のものとして、「橋」「河原」「門」「窓」「辻」「厠」「井戸」「墓地」などがあげられよう[11]。また、視線をさきにのばすことが不可能なため「見通しがきかない場」、すなわち他界を予想させる場としての「坂」や「角（かど）」も《境界》である。これらの物理的《境界》は、「山」や「橋」のように「世界の果て」、すなわち共同体の外部に位置するものと、「門」「井戸」などのように「生活圏」、すなわち共同体の内部に存在するものにわけられる。

ふたつの《境界》



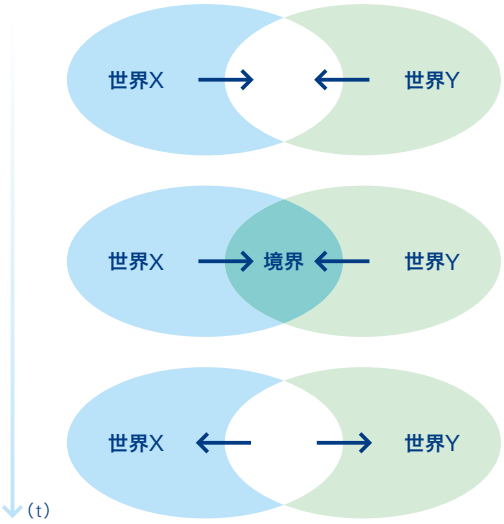
そして、これらの《境界》で出来するのは、もちろん生者と死者の交流だけではない。より一般化していうならば、「此界＝日常空間」と「他界＝非日常空間」の交流である。つまり、此界に属するものが、境界にはいりこむことによって、「この世ならぬ経験」、すなわち「非日常」を体験することになるのだ。

だが、このとき、此界に属するものの視点からすれば、日常世界と非日常世界が融合してきたのではなく、日常世界に非日常世界が侵入、もしくは日常世界が非日常世界と交替したと認識される。このばあいの典型的な例が「祭礼」である。これは、ふだん日常空間である「庭」や「広場」が、一時的に非日常空間へと変貌し、やがて日常空間にもどるというものであり、ヨーロッパの「五月祭」や「ハロウィン」のごとく[12]、非日常空間を招来することにより、日常空間のパワーをたもつことが目的であった[13]。このような祭礼において《境界》となる「庭」や「広場」は、本来、寺社の境内のような「聖別された空間」ではなく、日常的に集会などにもちいられる空間であり、このように一時的に非日常化する空間は「機能的」な《境界》と呼ぶことができよう。

しかしながら、物理的《境界》といえども、恒常的に《境界》というわけではない。このことは、たとえば「河原」にすむものにとって、「河原」は日常的生活空間であり、そこに非日常的要素の存在しないことをかんがえればわかる。もちろん、「河原にすむもの」は、「ふつうの」共同体からすれば「異人」すなわち「他者」であるが、それはあくまでも、「ふつうの」共同体側の視点でしかない。ほんらい、「此界」と「他界」は等価の存在であり、「日常的／非日常的」という見方も、相対的なものであろう。いうまでもなく、「山の民」には「山の民」の「日常生活」が存在するのだ。この点にかんがみて、《境界》の構成要素としては、「此界／他界」という視点を固定化した二分法ではなく、「世界Ｘ／世界Ｙ」のようなレッテルのほうがのぞましいといえよう。

かくして、「物理的《境界》」といえども、先験的（ア・プリオリ）な存在ではなく、そこに「視点」が導入されることで立ち現われる事後的（ア・ポステリオリ）な存在であることがあきらかとなる。「山」も「海」も「森」も「橋」も、「庭」同様、それだけでは《境界》たりえず、そこに「認識主体」が参入・関与することではじめて、その場が《境界》として析出するわけである。そして、《境界》が、此界（の民）と他界（の民）との交流点、すなわちコミュニケーションの場であるいじょう、そこには、とうぜんのことながら「相互行為」interaction が存在する。より厳密にいうなら、《境界》は、まさにその此界（の民）と他界（の民）の相互行為によって、その場的に生みだされ、刻一刻と変化し、相互行為の終了とともに消滅するものなのだ[14]。

《境界》の相互行為的生成と消滅



古代ギリシャで、豊穣・多産や厄除けの「お守り」として辻や街の境などにたてられた方形の柱ヘルマ herma は、人間の頭像をいただき、側面に屹立した男性器をそなえているが、もとは《境界》を守るものであり、これを神格化したものがヘルメース神 Hermes である可能性がたかいとされる（呉, 1956a : 153–154）。ヘルメースが「商業」「交通」「コミュニケーション」の神であるのは、もとのヘルマが、《境界》の守護神として、共同体の内部のものにとっても、外部からくるもの——商人、旅人——にとっても、そのような性格をそなえていたためであろう[18]。

かくして、「市」とは、ひとびとがつどうための「日常空間」であるとどうじに、そこに「他者」をむかえいれることにより[19]、「交流・交易」をおこなう「非日常空間」へと変貌する《境界》であった。

3.《境界》と「都市」

3.1. 日常と非日常の交叉点としての「市」

「市」という文字は、「市場」のような商業空間とどうじに、「市井」のような生活空間をあらわす。前者が「イチ」であり、後者は「マチ」にほかならない。両者に共通するのは、「ひとびとのつどう広場」ということであろう。かの天の岩戸神話においては、天照大神をいかにして呼びもどすかについて八百万の神々たちがつどい、対策会議をひらく。その場所は、『古事記』では「天安之河原（あめのやすのかはら）」、『日本書紀』では「天安河邊（あまのやすのかはら）」とされており、ともに「河原」すなわち《境界》であることを示唆しているが、『日本書紀』の 1 番目の「一書（あるふみ）」では「天高市（あまのたけち）」と記されていることから、「市」が集会にもちいられるような「広場」の意であったのはあきらかであり[15]、それは「河原」と等価の境界性をおびたものでもあった。さらにべつの語源的検討をつけくわえるなら、「市」をしめす英語の fair も仏語の foire も古仏語の feire に由来するが、これは、後期ラテン語の feria にさかのぼる。そして、この feria の語源である feriae は「祝祭の日」の意であり[16]、そもそも「市」が「非日常空間」であったことがわかる。また、夙（つと）に折口信夫は、山の民が「明日より春になる日に來て、其村の廣場で舞を舞ひ、土地の神の靈を鎭魂して歸る。其處を市と言ふ」（折口, 1928 : 424）とのべ、「市」が祝祭空間であることを指摘している[17]。

3.2.「交通」の場としての「市」

「市」がひとびとのつどう場であるいじょう、主要道の交叉点や、港につながる河川のほとりといった交通手段にめぐまれた空間に生じるのはとうぜんのことであろう。ぎゃくに、ひとのつどう場にむけて交通手段が発達することもある。いずれにせよ、けっかてきに「市」は交通至便の地となるが、これが「都市」、すなわち「都（あつまる）＋市（つどいまじわる）」の起源であることはいうまでもない。すなわち、ひとつの都市全体が《境界》たりうるのだ。

しかしながら、ひとつの都市のなかには、《境界》として機能する「辻」「橋」「河原」「墓地」が多数ふくまれるわけであり、そのおのおのが、相互行為を発生させるコミュニケーションの場であり、ひとやものの交通の場といいうる。「市」もまた、「都市」のなかにあって、都市の民＝共同体——もしくはその長——によって「管理」される存在であった。「市」でおこなわれる「祝祭」もしくは「交易」は、共同体のエネルギーを維持するためのものであるいじょう、共同体にとっての最重要事項のひとつであることはいうを俟たないが、くわえて、「非日常＝外部」をまねきいれるということは、謂わば強力な薬品を投与するようなものであり、ひとつまちがえば死にいたる危険なおこないだからである。「市」が、物理的に

共同体の周縁におかれたのは、「外部＝他者」との交流を容易ならしめるためだけではなく、「外部＝他者」の共同体への侵入を最小限にとどめるためにほかならない[20]。

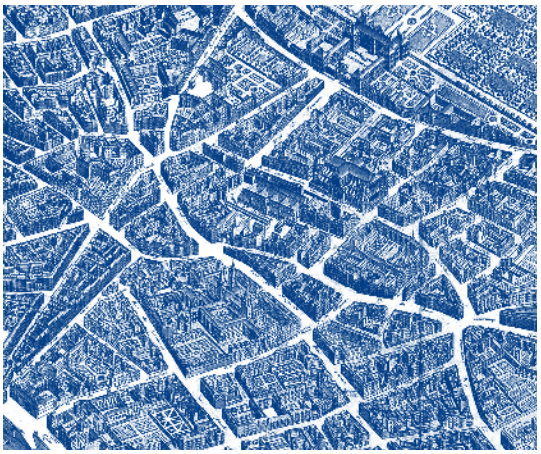
たとえば、パリを例にとれば、セーヌ川を交通の動脈として発達したこの都市は、ガロ・ロマン時代には、中の島であるシテ島を中心に、そこからセーヌの左岸、すなわち南側に発展していたとかんがえられている。だが、フランク王国となってからはセーヌの右岸、つまり北側にも街がのびはじめ、以後 17 世紀まではおもに北側が発展することになる。フランス王国の「市」は、セーヌ川の中の島たるシテ島の対岸、現在パリ市庁舎がそびえるグレーヴ広場にたった。ここはセーヌの砂州（グレーヴ）であり、港であったため、市場となったとかんがえられる。その後、「市」は、1135 年、ルイ 7 世によって移転させられ、1969 年までパリ中央市場（レ・アール）として存続することになる。その跡地はショッピングゾーンとなり、地下にはシャトレ＝レ・アールという巨大駅をもつパリの中心地であるが、そこはおそらく、12 世紀前半当時、城壁――確認されていないが、おそらくあったと想定されている――の外であった。中世のパリには、北にサン＝ロランの市 foire Saint–Laurent、南にサン＝ジェルマンの市 foire Saint–Germain がたち、たがいに競いあったようだが、これらの「市」は、いずれも城壁外にたてられている[21]。また、比較的あたらしいサン＝トヴィッドの市 foire Saint–Ovide は、ルイ大王広場（現在のヴァンドーム広場）にひらかれたのち[22]、ルイ15 世広場（現在のコンコルド広場）に移転させられたが、どちらの広場も、城壁を取り壊したのち、その近郊にひらかれたものであった。

同様に、墓地もまた、城外の、しかしながら近所におかれた。ただし、中央市場に隣接していたイノサン墓地のように[23]、もとは城外であったものが城内になり、そのまま長きにわたり衛生的にも治安的にも悪い環境を呈しつづけた例もある。さらに、のちに論ずるように《境界》としての性格をもつ「劇場」も、共同体の周縁――市街の拡張によって取り壊された城壁の跡地など――に建てられている。

このように、「市」をはじめとする《境界》空間は、「共同体（の長）」によって管理されていた。しかしながら、《境界》は、外部と通じているというその構造ゆえに、つねに管理をすりぬける存在でもある。パリにおいては、城壁の目的が、中世の「市街をまもる」という軍事的なものから、近代の「入市関税を徴収する」という経済的なものへと変化したが、このことが城壁の外に、安価な酒を提供する郊外酒場 guinguette やダンスホール、カフェの林立する歓楽街、すなわち悪所の登場をうながしたのである（喜安, 1982 : 11–15）。

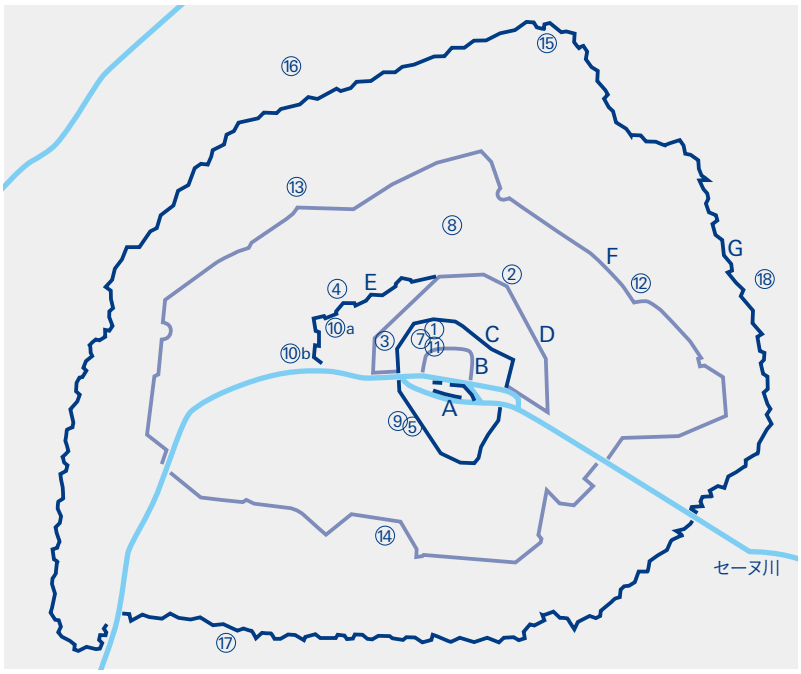
サン＝ジェルマンの市（中央の2棟ならんだ建物）と周囲の変化

トリュシェとオワヨー Truchet & Hoyaux の地図（1552）



テュルゴ Turgot の地図（1739）

パリの《境界》



A 西ローマ帝国末期の城壁（4世紀 ?）
B 想定される11世紀の城壁
C フィリップ・オーギュストの城壁
（右岸 1190–1209、左岸 1200–1215 / 1670–1685）
D シャルル5世の城壁
（1365–1420 / 1670–1685）
E ルイ13世の城壁（黄色堀 Fossés jaunesの壁）
（1634–1647 / 1670–1685）
F 徴税請負人 Fermiers généraux の壁（1785–1860）
G ティエールの城壁（1846–1919）

①オテル・ド・ブルゴーニュ座
（1543–17世紀）
②犯罪大通り（1760–1870）
③パレ・ロワイヤル
（コメディ・フランセーズ）（1630–）
④オペラ座（1875–）
⑤オデオン座（1782–）
⑥グレーヴ広場の市（?–12世紀）
⑦レ・アール（中央市場）（12–20世紀）
⑧サン＝ロランの市（12?–18世紀）
⑨サン＝ジェルマンの市（?–18世紀）

⑩a サン＝トヴィッドの市
（1666–1770）
⑩b サン＝トヴィッドの市
（1770–1777）
⑪イノサン墓地（?–18世紀）
⑫ペール・ラシェーズ墓地
⑬モンマルトル墓地
⑭モンパルナス墓地
⑮ヴィレット市場&屠殺場
⑯サン・トゥーアン蚤の市
⑰ヴァンヴ蚤の市
⑱モントルイユ蚤の市

4.《境界》とアート

4.1.《境界》と劇場

3.1. の折口信夫の指摘のように、《境界》は藝能の起源であり、祭礼は《境界》の重要な要素のひとつであった。すでにみたように、「市」と「祭」との等価性はあきらかであるが、ウォルフォードの古典的記述によれば（Walford, 1883）、古代ギリシャの祭礼・競技会のおりにはいっさいの「敵対行為」が停止されるため、その間を利用してたくさんの「市」がひらかれたとされる。また、古代日本における「歌垣」という呪術的起源をもつパフォーマンスも「市」でおこなわれた[24]。さらに 3.2. にみたパリの「市」── foire は縁日とも訳される──には、とうぜんのようにかずかずの見世物があつまったが、それぞれに「市の芝居」théâtre de la foire が存在し、コメディ・フランセーズなどの「大芝居」grands théâtres の危機感をあおるほど隆盛をきわめた。

そもそも、パリの例にみるように、「劇場空間」じたい《境界》におかれる存在であった。シャルル 5 世の城壁とルイ 13 世の城壁が取り壊された跡地を整備した街路の北側部分は、17 世紀以降「グラン・ブルヴァール」Grands Boulevards と呼ばれ、劇場や食堂の建ちならぶアミューズメント・タウンとなった。18 世紀になると、城壁跡地の東側の「犯罪大通り」Boulevard du crime と異名をとったタンプル大通り Boulevard du Temple にも、劇場が軒をつらねることになる。

大阪においても、一大歓楽街となった道頓堀の劇場街は、1626（寛文 3）年に、長堀川の北で西

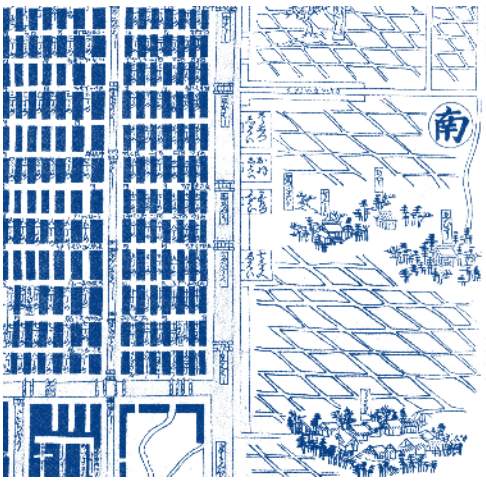
横堀川と佐野屋橋筋にはさまれた勘四郎町にあった劇場街が、当時の新開地、すなわち「街の外」であった難波新地に移されたことがはじまりであった。

廣末（1970 / 88）もするように芝居小屋は遊郭同様の「悪所（あくしょ）」であり、江戸の吉原や大坂の新町やのちには松島などの遊郭が、都市の管理者によって街の周縁部あつめられたように、劇場もまた、共同体のマージナルな空間におかれた。これはもちろん、新開地への集客手段であったが、芝居や郭遊びといった「非日常空間＝他界」を「日常空間＝此界」の外におき、日常生活の活力を維持するために、ときおりそこへ通うという図式は、此界をまもるための他界の管理形態のひとつにほかならない。だが、さきにのべたように、この図式は、いわば「此界視点」の非対称的構成であり、そこにはつねに「他者」の差別と排除がつきまとう。とうぜんのことながら、「他者」との交流こそが《境界》を《境界》たらしめるゆえんであるいじょう、そのような非対称的視点ではなく、中立的視点、すなわち「境界視点」を導入する必要があるのだ。

4.2. 日常空間と非日常空間との連続性

すでに 2.2. に論じたように、《境界》は日常と非日常の交点に生成するものだが、このことはつまり、そもそも日常と非日常の連続性をしめしていよう。たとえば、縁日において屋台のたちならぶ道路は、ふだんはふつうの道路としてもちいられている。また、野外テント劇がおこなわれる広場は、日常的にはひとびとがさまざまにもちいる公園である[25]。そこに、いっとき、野外劇場がつくられ、一定期間興行をおこなったのち、劇場は解体され、そこはもとの広場にもどる。これは観客やとおりすがりのひとびとにとっての光景であるが、そこで芝居をする役者やスタッフたちにとっては、その場は、一定期間――野外テント劇場の建てこみからバラシまで――、文字どおり「生活の場」であって、そのなかで芝居をするのみならず、寝起きし、食事し、そこから会社に出勤したりもする「日常」と「非日常」がないまぜになった空間なのだ。この観点にたってみれば、「都市」とも、その空間じたいが、ひとびとを惹きつける巨大な「市」という《境界》として、非日常性を有するとともに、そこで働いたり暮らしたりするひとびとにとっては日常性の空間にほかならないのであり[26]、やはり日常と非日常がおりかさねられた場なのだといえよう。畢竟（つまるところ）、「日常」と「非日常」じたいが截然と分かちうるものではなく、シームレスにつながった一連のものなのだ。

1657 年の道頓堀周辺



中央を縦にながれるのが道頓堀。その右側に芝居小屋。そのさらに右（南）は、千日寺と刑場もあった千日墓。左下隅は新町遊郭。そのうえ（東）、西横堀川をはさんだ対岸が勘四郎町。

4.3. 都市とアート

かくして、「都市」は、その《境界》性をきわだたせてこそ、日常生活をおくるためのパワーを補充し、維持することの可能な空間となる。その典型的なものとして、たとえば冒頭に紹介した欧州文化首都のほか、大阪市のばあい、「天神祭」「御堂筋 kappo」のような年に一度のおおがかりな祭や、毎月 21、22 日に開催される四天王寺の縁日などが想起されよう。もちろん、「市」としての日々おこなわれている商業行為、すなわちものやひとの交換・交流そのものもまた《境界》の特徴のひとつではある。しかしながら、いずれのケースにおいても、たんに祭や商いやコミュニケーションがおこなわれるだけでは、《境界》は発生しない。そこにおける「ふたつの世界の相互行為」、すなわち「異質なものどうしの混淆性」と「生成／消滅をくりかえす流動性」がきわだたせられる必要があるのだ。

いっぽう、藝能の発祥空間としての《境界》は、

舞踏、演劇、音楽などのパフォーマンス・アートやある種のインスタレーションのような、時間とともに変化するアートと親和性がたかいが、それももちろん、《境界》のもつ「動的／その場的」性格のためである。そもそも、《境界》をおとなう他者には、おおく非定住者である遊行(ゆぎょう)藝人があり、折口のいう「まれびと」として、神であると同時に魔でもある、畏怖と憧憬の対象とされてきた[27]。現代におけるいわゆる「アーティスト」は、この「他者」の末裔であるわけだが、これまでのわれわれの考察、すなわち日常と非日常の連続性をふまえるならば、かれらはけっして「特殊」な存在ではなく、ふつうの日常生活をおくるひとびとであり、じつはわれわれの「隣人」にほかならない。だが、そのような「隣人」も、《境界》というトポスにおかれることで、「他者」となりうるわけである。そしてこのことは、「隣人」にかぎらず、「われわれ」にもおこりうる。「アート」とは、先天的に才能に恵まれた少数者だけがなしうるものではなく、だれにもひらかれたものなのだ。ただし、そのような変化が生ずるためには、《境界》すなわち「他者」と交流しあう場が必要となる。それはもちろん、「都(ま)ー市(ち)」であるのだが、そのなかでも、とりわけ交流に意をもちいた「動的コミュニケーション空間」がもとめられよう。そもそも art の語源であるラテン語のアルス ars は、とうぜんのことながら「技・藝」を意味したが、もともとは「結合・発明」の意であった[28]。これは、とりもなおさず、「ふたつのものを結びあわせることで、あらたなものを創造する」ことにほかならない[29]。これまでしられた既知のものではなく、未知のものを創発するためには必要なのは「結びつけ」であり、それを可能にするのはやはり《境界》という空間なのである。

さらには、アート＝藝のもつパワーは、劇場の配置にみられたように、ときに共同体の管理者をおびやかしうるものであった。これはもちろん、「遊行藝人＝服(まつろ)わぬもの」という管理不可能な存在にたいする畏怖のためとかんがえられるが、「世界 X」と「世界 Y」の交流・結合によって創発される「未知」の存在(モノ)への畏怖もおおいに影響したであろう。蓋し、アートは「悪所」に生ずるのであり[30]、しかも、その壁をこえて、共同体全体に影響をあたえるものの謂であった。

5. まとめにかえて――創発の根源としての相互行為

これまで「他界」とみなされてきたトポスは、そこが「他界＝非日常と此界＝日常の交叉点」であるということにおいて、じつは幅をもった《境界》であった。そして、その《境界》という二世界――もしくは日常と非日常――の交点は、恒常・普遍／不変なものではなく、二世界のひとびとの相互行為とともに生じ滅する一時的・その場的な構築物である。そのような《境界》は「市」や「悪所」という都市の周辺的空間により代表されたが、ひとびとがつどい、交わり、ものを交換し、またなにかを生みだすトポスという点において、都市もまたひとつの《境界》といいうる。とりわけ、その内部にあって、ひとびとが「他者」と交流しあう「動的コミュニケーション空間」はアートを生成させるが、そのアートは共同体にたいする脅威であるとどうじに驚異であり、そのパワーは共同体の日常的エネルギーを恢復し、維持するものとなりうるのだ。

じつはこのような「動的コミュニケーション空間」を志向したこころみは、すでにいろいろなかたちで実施されている。筆者もディレクタをつとめる「船場アートカフェ」もそのひとつにほかならない（嘉名, 2012）。船場アートカフェとは、大阪市の中心部の一隅に存在する物理的空間の名であるとどうじに、さまざまな企画の集合体でもある。それは、その「カフェ」という名がしめすように、ひとびとの交流点たりうることをめざした事業であるが、ワークショップやセミナー、あるいは「まちのコモンズ」のようなイヴェントの開催によりひとびとの交流をはかってきた。しかしながら、ここでも重要なことは、たんに交流の場を用意することではなく、そこにつどうひとびとの「相互行為」をうながし、未知のモノの発生をまつことにある。かくして、われわれのこころみは、今後も、ひとびとのコミュニケーション空間を用意するだけでなく、そこにつどう、いっけん等質にみえるひとびとのあいだの異質性 hétérogénéité / heterogeneity をきわだたせ、相互行為させることをめざすことにあるといえよう。

［注］

1 当初は欧州連合理事会 Council of the European Union / Council of the European Union の事業であり、名称も「欧州文化都市」 European City of Culture / ville européenne de la culture であったものが、2005 年より欧州委員会の所轄となり、名称も現在のものにあらためられた。

2 メルクーリによる提案は 1983 年。

3 以後も、グラスゴー（イギリス）、ダブリン（アイルランド）、マドリード（スペイン）、アントウェルペン（ベルギー）、リスボン（ポルトガル）、ルクセンブルク（ルクセンブルク）、コペンハーゲン（デンマーク）、テッサロニキ（ギリシャ）、ストックホルム（スウェーデン）、ヴァイマール（ドイツ）と、1999 年まで、1 国 1 都市、かつ首都級の開催地がつづけられた。

4 開催都市は相互に協力することがもとめられる。

5 EU から交付される予算は 150 万ユーロ（およそ 1.5 億円）と少額であるため、経済的恩恵よりはブランドを求めて応募すると分析されている（リベルタス・コンサルテンィグ 2009）。もちろん、経済効果はおおきな訴求要素であり、2004 年の北仏リール市が欧州文化首都の開催地となったときの予算は 73.7 百万ユーロ（およそ 78 億円）であり、1 ユーロあたり 12 ユーロの還元があり、2013 年に予定されている南仏マルセイユ市の予算では、1 ユーロあたり 8 ユーロの還元がみこまれている（リベルタス・コンサルテンィグ, 2009 : 105）。

6 一昨年 2010 年はエッセン（ドイツ）、ペーチ（ハンガリー）、インスタンブール（トルコ）であり、ことしはトゥルク（フィンランド）とタリン（エストニア）、来年はギマランイス（ポルトガル）とマーリボル（スロヴェニア）と、いずれも国境もしくは、国境付近の街がえらばれている。

7 この点にかんしては、夙に小松（1972）が「民俗的次元での山中他界観の根底には、山岳が、現世の最果てであるという認識と共に、この現世とその遙か彼方のどこかに存在するとされている隔絶した世界である他界とを結びつけ媒介しているという認識が存在して」（ : 187–188）いると指摘しているが、小松は「山岳＝他界」として、その「境界性」を他界の従属物とみなしており、その点において、われわれとかんがえを異にする。

8 『古事記』では「伊邪那岐」「伊邪那美」、『日本書紀』では「伊弉諾尊」「伊弉冉尊」と記される。

9 『日本書紀』では「一書（あるふみ）に曰く」として異説が併載されているが、その 9 番目にこの記述がみられる。

10「冥界の王の宮」にいたるべしとされながら、じっさいにおもむいたのが「世界の果て」であることは、「冥府の王の宮」は、古事記の「黄泉の国の殿」とおなじく《境界》であることを示唆する。オルペウスが亡き妻をもとめて冥界くだりをしたときも、到達したのは「冥府の王の宮」であった。

11 いわゆる「怪」の出る場所は《境界》である。

12 五月祭がおこなわれる 5 月 1 日は「夏のはじまり」であり、半年後の 11 月 1 日は「冬のはじまり」である。ハロウィンは 10 月 31 日の晩におこなわれるが、これは実質的に 11 月 1 日 —— かつての元日 —— の開始時とみなしてよかろう。いずれも豊穣にかんして、前者は予祝儀礼として、後者は祈願儀礼としておこなわれた祭礼が起源であったとかんがえられる。また、日本では、6 月 30 日の「夏越（なごし）の祓（はら）え」、12 月 31 日の「年越の祓え」が、人間のパワーを持続するための祭礼としてしられている。

13 民俗学のよくしられた概念である「ハレ・ケ・ケガレ」について、宮田（1979）は、「ケガレ」には農耕の危機である「食枯れ」と人間のパワーの危機である「気枯れ」の意があり、これらを「ハレ」によって恢復し、「ケ」を維持すると論ずる（ : 100–102）。

14 このかんがえかたは、いうまでもなく「構築主義」によっている。この思考法の詳細については、福島（2006）を参照されたい。

15 日本にかんする現存する最古（3 世紀末）の文献である『魏志倭人伝』の「邪馬台国」の説明には、「国々に市あり、有無を交易し、大倭をしてこれを監せしむ」とあって、すでに交易の場としての「市」の存在が確認される。

16 これらの語が定期的な「市」のほかに「縁日」の意ももつのは、このためである。

17 しかしながら、このような、「内部」のエネルギーの維持のため「外部」のパワーを導入するという図式が前提するのは、「此界」からの一方向的認識構造であり、「外部＝他者」を必要以上に「聖別化」もしくは「賤別化」するという危険性をはらんでいるため、注意が必要である。

18「境の神」としては、日本の道祖神、すなわち塞（さい）の神が同様の性質をもつ。

19 以後にいう「他者」とは、「他界のひと」ではなく、「外部のひと」として、コミュニケーション可能かどうかも定かではない、「絶対的他人」Autre をさす。

20 じっさい、古代ギリシャでは、市場が街の周辺から中心部に移動したさい、商売にたずさわれるのは、財産所有権や市民権をもてない在留外国人という「内なる他者」に限定されていたとされる（Agnew, 1986 : 46）。

21 もちろん、それぞれの市の収益を手にした修道士たちの所属する、サン＝ラザール修道院とサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院という宗教施設が、そもそも「俗世」をはなれた地にたてられていることとも無関係ではない。

22 カプチン会女子修道院におさめられた聖オウィディウスの遺物をみようとあつまってきたひとびとあいてにひらかれた商いの場が起源とされる。のち 1764 年に、ちかくにヴァンドーム広場ができ、そこに市がうつった。

23 もとは墓地でも市がひらかれていたのが禁止され、塀をつくって閉じられた空間とされた。

24 たとえば、『万葉集』第 12 巻の詠み人知らずの歌「紫は灰指す物ぞ海石榴市（つばいち）の八十の街（ちまた）に相へる兒や誰」は、「市」が歌垣の場であった証左とされる。

25 筆者もたずさわってきた大阪野外演劇フェスティバル（1999–）のように、行政が公園などの土地を貸しだすケースはまれかもしれない。日本のばあい、おおくは、寺社の境内や私有地に仮設劇場がたてられてきた。また、パリのサン＝ランベール公園 Square Saint–Lambert のように、「常設」の野外演劇スペースが設けられている

ケースも存在する。

26 筆者の所属する演劇集団の「浪花グランドロマン」は、1991 年から毎年大阪市内に仮設劇場をたて、野外劇もしくはテント劇を上演してきたが、われわれにとって、その場所は、一定期間、「帰るべき」本拠地、すなわち日常空間となるのが常である。

27 たとえば、薩摩藩では他国からきた商人に祈祷や占いを依頼することを禁ずる命令がだされていたが、これは、非定住者としての商人もまた「異人＝他者＝力を有する者」とみなされていたことの証左となっている（高取, 1977 : 10）。

28 語根の ar– は「結びつけること」「とりつけること」をあらわすとされる（Bréal & Bailly, 1885 : 18）。

29 ars は古ギリシャ語 テクネー techne の訳語でもあったが、語源的に木工のような「手わざ」の意味をもつこの techne を、プラトンもアリストテレスも「知」のいっしゅととらえている。

30 現代において、このような《境界》は、かならずしも物理的空間に限定されないともかんがえられる。たとえば、ネットワーク上に展開されるヴァーチャルな交流空間がそれであり、動画投稿サイト「Youtube」や、それに対抗してたちあげられた「ニコニコ動画」は、その交流からあらたなアートが創発されている点において、その一例であるといえるかもしれない。

［文献］

赤坂憲雄, 1985,『異人論序説』砂子屋書房

赤坂憲雄, 1989,『境界の発生』砂子屋書房

網野善彦, 1987,『［増補］無縁・公界・楽』平凡社ライブラリー150, 平凡社, 1996

折口信夫, 1928, 鷺替へ神事と山姥,『折口信夫全集』第16巻, 中公文庫, 中央公論社 : 417−429

折口信夫, 1952, 民族史觀における他界觀念,『折口信夫全集』第16巻, 中公文庫, 中央公論社 : 309−366

嘉名光一, 2012, 文化・アートを活用した都市再生の試み――大阪の歴史的都心における船場アートカフェの取り組み――『URP GCOE DOCUMENT 13』大阪市立大学都市研究プラザ : 6−27

神田由築, 2004, 都市文化と芸能興行――大坂を中心として――,『都市文化研究』3, 大阪市立大学大学院文学研究科都市文化センター : 138−151

喜安朗, 1982,『パリの聖月曜日』岩波現代新書, 岩波書店, 2008

鯨井千佐登, 2006,『境界の現場』辺境社

呉茂一, 1956a,『ギリシア神話』上, 新潮社

呉茂一, 1956b,『ギリシア神話』下, 新潮社

國學院大學デジタル・ミュージアム, 2011,『万葉神事語辞典』k–amc.kokugakuin.ac.jp/DM/dbTop.do?class_name=col_dsg ［Online available : 2011/12/20］

小坂井敏晶, 2004, 開かれた国家理念が秘める閉鎖機構――フランス同化主義をめぐって, 石井・工藤編『フランスとその〈外部〉』東京大学出版会

小松和彦, 1972, 世捨てと山中他界――山岳空間の認識論的構造,『神々の精神史』増補新版, 北斗出版, 1985 : 177−197

高取政男, 1977, 遁世・漂泊者の理解をめぐって, 山折哲雄・宮田登編『漂泊の民俗文化』日本歴史民俗論集8, 吉川弘文館, 1994 : 2−16

谷川健一, 1983,『常世論』講談社学術文庫, 講談社, 1989

塚田孝, 2004, 大坂における傾城町の成立と性格,『都市の異文化交流《大阪と世界を結ぶ》』大阪市立大学文学研究科叢書2, 清文堂

土井淑平, 1997,『都市論』三一書房

秦孝治郎, 1977,『露天市・縁日市』［坂本武人編］, 中公文庫, 中央公論社, 1993

廣末保, 1965, 遊行的なるもの,『悪場所の発想』廣末保著作集6, 影書房, 1997

廣末保, 1970/88, 悪場所論おぼえがき,『悪場所の発想』廣末保著作集6, 影書房, 1997 : 179−203

福島祥行, 2002, 演劇は祝祭か――《境界》の相互行為的発生――,『Theatre Research Bulletin』第6号, 近現代演劇研究会 : 6−11

福島祥行, 2004, 都市の境界性と遊行性,『Lutèce』第32号, 大阪市立大学フランス文学会 : 53−61

福島祥行, 2006, 独我論と普遍性の構造――構築主義的コミュニケーション研究のこころみ2――,『人文研究』第57巻, 大阪市立大学大学院文学研究科 : 165−180

宮田登, 1979,『神の民俗誌』岩波新書黄97, 岩波書店

横田冬彦, 2000, 芸能・文化の世界, 横田冬彦編『芸能・文化の世界』シリーズ近世の身分的周縁2, 吉川弘文館 : 1−18

リベルタス・コンサルティング, 2009, 文化芸術創造都市に関する調査研究文化庁報告書, http://www.bunka.go.jp/bunka_gyousei/torikumi/pdf/chousa_houkoku.pdf ［Online available : 2011/12/20］

Agnew, Jean–Christophe, 1986,『市場と劇場』［中里壽明］平凡社, 1995

Bréal, Michel & Bailly, Anatole, 1885, *Dictionnaire étymologique Latin*, Hachette

Caillois, Roger, 1950,『［改訳版］人間と聖なるもの』［塚原史他］せりか書房, 1994

Commission européenne, 2011, Capitales européennes de la culture, http://ec.europa.eu/culture/our-programmes-and-actions/capitals/european-capitals-of-culture_fr.htm［Online available : 2012/03/12］

Corbin, Alain, 1982, *Le Miasme et la jonquille : L'Odorat et l'imaginaire social XVIIIe–XIXe siècles*, Aubier Montaigne

Fiero, Alfred, 1996,『パリ歴史事典』［鹿島茂他］白水社, 2000

Walford, Cornelius, 1883,『市の社会史』［中村勝］そしえて, 1984